ホームウッドの女：ルーシー
――過去と未来の掛け橋――
Belle's Follower

加藤万毟子
KATO Makiko

ワイドマンと作品

この拙論で扱う作品、*Sent for You Yesterday*は、John Edgar Widemanの*The Homewood Trilogy*中の最後の作品である。ワイドマンの作品数は少なくないが、他のアフリカ系アメリカ人作家に較べ、日本では作品数の割には知られていない（加藤　51）。三部作の最初の作品である*Damballah*は12の短編で構成され、物語はHomewoodを中心に語られる。ホームウッドは北アメリカ東部に位置するPittsburghのアフリカ系アメリカ人コミュニティーである。ワイドマン一族は、一族の母、Mother Belleの時代からホームウッドで暮している。冒頭に一族の家系図が示されているが、*Damballah*の物語は、1840年代のマザー・ベルの時代から、1920年代のLizabethの時代を中心に展開される。一方、*Sent for You Yesterday*は、ワイドマンの母、リザベスの時代以降が中心である。フラッシュバックの形式をとるこの作品はわかりにくいが、*Washington Post Book World*は、*The Homewood Books*のカヴァーに次のような批評を載せている。

> "Like Faulkner's, Wideman's prose fiction is vivid and demanding――shuttling unpredictably between places, narrators and times, dwelling for a paragraph on the surface of things, then sneaking a key event into a clause that springs on the reader like a booby trap…… *Sent for You Yesterday* is a book to be savored."（*The Homewood Books* jacket）

ワイドマンがこの作品を次の世代へ、つまり、Danny, Jake, Jamila[1]という三人の子供たちに捧げているのは示唆に富む。*Sent for You Yesterday*の冒頭には、次の題辞が記されている。

> Past lives live in us, through us. Each of us harbors the spirits of the people who walked the earth before we did, and those spirits depend on us for continuing existence, just as we depend on their presence to live our lives to the fullest. (349)[2]

伝説の奴隷であるOrionとBelle[3]は、差別に対して、どちらかと言えば、静かに抵抗し、いかなる外的暴力も人の内面までは破壊しえないという彼らの"voice"を示した（加藤　51－52）。彼らの精神は、脈々とホームウッドの人々に継承され、人々に生きる力を与えてきた。この精神を次の世代に伝えるのは、ホームウッドの若者の義務である。

物語の概略を紹介しておこう。かつて、ワイドマンの祖父、John French, Strayhorn, そしてAlbert Wilkesがホームウッドの三羽烏であったように、ジョン・フレンチの息子であり、ワイドマンの叔父であるCarl, BrotherそしてLucyは三羽烏である。ホームウッドのMr. and Mrs. Tateは大きな屋敷で多くの孤児を育てたが、ブラザーとルーシーもこの夫妻に育てられた。ホームウッドの人々は、ルーシーの幼い頃、皆、家族のようだった。ルーシーは彼女より体の大きなブラザーを、ベビーカーに乗せ、実の弟のようにかばいながら、共に暮していた。ブラザーは、我が家のように、カールの家に自由に出入りし、兄弟のように育った。カールが病気の叔父、Billにかわって庭の草取りに出かける時は、ブラザーも一緒だった。

一方、ホームウッドの人々が、「黒人」として人種差別に耐えねばならないのは、ジョン・フレンチの時代とさして変っていない。腕の良い壁紙職人であるジョン・フレンチは、黒人であるために、その腕を十分振うことができなかった。この不条理は*Damballah*で語られているが、*Sent for You Yesterday*に於いても、くり返し語られる。"……pay you half what he'd pay a white boy……The white man sits there looking you up and down like he's God Almighty"（479）のように。

カールの時代にも、状況の進展は遅々たるものである。カールは美術学校に通っていたが、ある日、教員の一人

が彼に差別的発言をするのだ。カールは優秀な学生であった。教員たちは、他の学生の手本として、カールの作品を皆に見せていた。しかし、カールは次のような言葉に耳を疑うのである、“Best student we have but you're wasting your time here. Can't earn a living with what you're learning here”（477）。この日がカールには、“[his] graduation day”（477）となった。彼は好きな美術を捨てざるをえなかったのだ。

しかし、ルーシーら三羽烏は、オリオンとベルの精神でこの不条理を乗り越えようとするのである。Junebugはブラザーと Samanthaの子供である。ある日、幼いジューンバッグは焼死し、それ以後ブラザーは言葉を失い、サマンサは　狂人のラベルを貼られてMayviewという施設へ送られる。ルーシーはサマンサとたいした面識もないが、ブラザーの死後、彼に代ってメイヴューを訪れるのだ。

ブラザーもサマンサも、常軌を逸しているかのように受けとめられているが、真実を見極め、人としての義務を果し、彼らの足跡を次世代に伝えるのはルーシーである。この拙論では、ブラザーとジューンバッグ、サマンサ、そしてルーシーを中心に、上述の題辞、「過去の人々の精神が、現在の人々の中にどのように存在し、次の世代の人々にどのように継承されていくのか」を検証する。

ブラザーとジューンバッグ

ブラザーとは、「仲間」又は、「同じ境遇にある人」（岩波　国語辞典）であるが、ホームウッドのブラザーはalbinoである。O.E.D.によれば、アルバイノとは、

> A human being distinguished by the congenital absence（partial or total）of colouring pigment in the skin, hair, and eyes, so that the former are abnormally white, and the latter of a pink colour, and unable to bear the ordinary light.　（O.E.D. 297）

である。アルバイノであるブラザーは、肌の色は白いが、顔立ちは黒人である。“The thick lips, the broad flaring wings of his nose. Hooded eyed with lashes clinging like blond ash”（461）であり、肌は、“a color [Samantha] hated”（461）である。彼は、“[a] white blackman”（461）なのである。

ワイドマンはブラザーがアルバイノであることについて、Bonnie TuSmithとの対談で、次のように語っている。

> A absence of color throws the whole system into shambles, because if we were to be classified by color, what do you do with a person whose body denies color—— it's transparent. Then the primary way of ordinary human beings—— the primary hierarchy——is destroyed.（TuSmith 203）

こうしてみると、ブラザーの黒人としての顔立ちは、差別による苦難の道とオリオンの精神の表象である。彼の白い透き通るような肌の色は、黒人にも白人にもなりえないことを示すものである。さらに、ワイドマンが語るように、ブラザーの白い肌は、肌の色による人間の序列化からの解放と、ブラザーが提起する問題が人間共通の普遍的問題であることを示すものである。

一糸まとわぬ姿で主人の屋敷のポーチに腰をおろすオリオンは、白人によるあらゆる搾取を表していることについては、『ダンバラの女』で述べた。ブラザーの肌の色も、搾取の歴史を語っている。

腕利きの壁紙職人、ジョン・フレンチの人種差別による苦労は、彼の靴が語っている。この靴は彼の歴史である。糊やペンキや泥がこびりついた靴から、もはや最初の色を想像することはできない。“You could use a chisel on his shoes and never get down to the first color”（399）なのだ。

この直後のブラザーの肌の色についての描写は、ブラザーに課せられた搾取を表している。

> Carl's friend Brother was like somebody had used a chisel on him. A chisel then sandpaper to get down to the whiteness underneath the nigger.（399）

長期に渡る労働と貧困のために見る影もない靴は、のみで削っても最初の色に達し得ないと言うのに、黒人の顔立ちのブラザーは、黒い肌をのみで削られ、さらにやす

りをかけられ、白い肌になったのである。ブラザーの肌の色は、裸のオリオンと色を失ったジョン・フレンチの靴が語る以上に、過酷な試練を語っているのである。

のみとやすりで痛めつけられたブラザーの肌の色は、黒人にも白人にもなりえないアイデンティティを奪われた者の苦悩と、ジューンバッグを失った彼の苦悶の象徴でもある。ブラザーは、彼と同じ道を歩まねばならない息子を理解し、寄り添っていたにもかかわらず、ジューンバッグは幼くして世を去ってしまった。

このアルバイノ、ジューンバッグは、ブラザーと黒人であるサマンサの子である。ジュンーバッグは、ホームウッドでは異質である。サマンサの横で眠るこの子は、黒い顔を見慣れた者には馴染まないのである。

人は異質なものに対して、往々にして不寛容である。ホームウッドの美しい女奴隷ベルも、ホロコーストに関係する作品である*The Painted Bird*の少年も、彼らが他の者たちと異っているというだけで受難に堪えねばならなかった。Frantz FanonはDavid Diopの "Le temps du martyre" から引用して、異質であることについて述べている。

> The white man killed my father.
> Because my father was proud
> The white man raped my mother
> Because my mother was beautiful. (Fanon 136)

美しいベルは奴隷主の注目の的であった。しかし、誇り高いベルは、奴隷の身でありながら、勇敢にも、白人の欲求を拒否した。故に、頭に籠をかぶせられたまま一生過ごさなければならなかった。『ペンキを塗られた鳥』の少年は、東欧農民の間では、誇り高き、洗練された少年だったのかもしれない。人は大多数の者のほうが正しいと錯覚しがちであり、自分より優れた者は排除したいと思う傾向がある。しかも、虐待に耐える者には、さらに虐待を加える残酷さも秘めている。

サマンサの肌の黒い子供たちにとって、ジューンバッグは醜いあひるの子である。ブラザーが彼の側にいると、彼は安全である。しかし、ブラザーが側を離れると、子供たちはジューンバッグに辛くあたるのだ。やがてジューンバッグが学びとる生活の知恵は悲しい。彼は、他の子供たちから離れ、一人ひっそりと過すようになる。彼は他の者たちの存在を忘れ、歌を口ずさみつつ一人でいる時だけ、平和な時を享受するのだ。

幼いジューンバッグの姿に、我々は、河辺にたたずむオリオンとオリオンに続く人々の歴史をみる。ジューンバッグは、彼を苦しめる者たちに向って怒り狂うこともなく、彼に辛く当る者たちを、"Just sad when they're ugly doing ugly things to him" (470) なのである。Doreatha Mbalia は、"The Songs of Reba Love Jackson" の中で、Rebaの歌について語っている。

> Reba uses her songs to tell the stories of opression and injustice that her people, experience, believing that "We's All God creatures and it ain't in the Bible to sit in the back of no buses or bow down to any man……" (Mbalia 75－76)

ジューンバッグのハミングは、このように訴えているにちがいない。

静かに自己を主張するジューンバッグは、幼くして焼死してしまう。ジューンバッグの死以来、ブラザーは一生沈黙のうちに暮すのである。

ジューンバッグの死は折しも7月4日、アメリカの独立記念日である。サマンサが、この日のために、料理を用意している時である。彼は火の中に落ち、"a human torch" (468) のように燃え上がるのだ。最初にジューンバッグの様子を大声でサマンサに伝えるのは、あの "iron-wild baby……didn't like anybody touching her" (462) のBeckyである。ベッキーはサマンサの変り者の子供である。このベッキーさえ、ブラザーには素直に抱かれ、彼の背に心地よさそうに身をまかせていたことを確認しておこう。

ベッキーの知らせで、サマンサが身を投げ出してジューンバッグを助けようとする時には、すべてはすでに手遅れになっていた。ジューンバッグの死をサマンサから聞かされると、ブラザーの表情は "turned to stone" (468) となるのである。彼は石像のように言葉を失った（捨てた）まま16年間過ごすのだ。

ブラザーに関してのホームッドの風説は、"he [is] feebleminded and crazy" (461) であったが、"a giant chalky stone" (468) となったブラザーは、風説の確証となったであろう。

しかし、ブラザーの沈黙は、ジューンバッグを失った悲しみのみならず、オリオンからホームウッドの人々に継承された“voice”（*Damballah* 178）である。オリオンが白人の奴隷主から与えられる食物を拒否し、河辺で自然と一体となり、長時間かけて魚を捕らえる姿は、他の奴隷たちには馬鹿げたことであったであろう。しかし、食物の拒否は不条理への抗議であり、自然との一体化は、オリオンのアフリカの民としての本来の姿の主張である。顔なき多くの奴隷のなかでのオリオンの個の主張である。

インド出身のアマーテイア・セン教授は、自立した精神の重要性を説いている。自立した精神とは、「自分でよく考え、選び取る姿勢」（読売　27）であると言う。他の多くの奴隷のようにではなく、不正と信じることに抗議を示し、アフリカへの回帰とアイデンティティを主張するオリオンのヴォイスは、自立した精神と言いうる。

ブラザーの長き言語の不在は、かれの主張である。彼は、沈黙によって、ジューンバッグが受けた不正へ抗議しているのだ。しかしながら、この章の冒頭で示したように、ブラザーが仲間を意味すること、ワイドマンが、アルバイノを登場させることによって、肌の色による人種の序列化を破壊しようとしていることを考えれば、ブラザーの主張は人種を超越している。時代の変化と共に、人々が自己中心的になっていくなかで、ブラザーは、静かに、普遍的レベルで不正を告発し、共存を説いていたのだ。それは、ルーシーが発見する絵のなかで語られている。

サマンサ

2002年のノーベル文学賞受賞者、ハンガリー人のImre Kertész氏は、*Kaddish*[4] *for A Child Not Born*のなかで、人の誤について次のように述べている、“sense of infallibility with which one usually practices one's fallibility”（Kertész 25）。女奴隷ベルのように誇り高い黒人女性サマンサは、我々にこのケルテースの言葉を問いかけている。

サマンサは黒人であることに誇りを抱いている。かつてベルが女として白人男性に身を任すことがなかったように、サマンサは恋人として黒人男性しか選ばなかったのだ。しかしサマンサは、気難しい女の子、ベッキーがブラザーに心を開いたように、なぜかブラザーにひかれていく。

“Zulu queen”（513）のように美しいサマンサは、自立した精神の持主である。黒人の顔立はしているものの、白い肌のブラザーを人々は恐れていたにちがいない。ブラザーと肌が触れ合うだけで、黒い肌に染みが残ると信じていたとしても不思議ではない。サマンサも、誇りに思う美しい黒い肌に染みが残るのではないかと心配するのだ。しかし、彼女は人々の意見に盲従することなく、図書館へ出向き、自らの目でアルバイノについての知識を得るのである。そして彼女は、ブラザーとの接触で、彼女の肌が“pinto”（445）に変る心配のないことを確認するのだ。

こうして安心してブラザーを受け入れるサマンサだが、ブラザーを受け入れることは、彼女にとって何を意味するのだろうか。それは、アルバイノと受難を共にすることであり、ブラザーが絵に託した夢を実現することである。

ジューンバッグは、ブラザーとサマンサの夢の結晶のはずである。しかし彼は、「ブラザーとジューンバッグ」の章で述べたように、迫害された。異質な者への人の不寛容についてはすでに述べたが、不寛容について補足しておきたい。人は最も似通った者、或いは身近な者同志が集まり、輪の外にある者を異質な者と見なしがちである。この傾向は、ホームウッドのマザーベルが、白人の夫、チャーリーと共にピッツバーグへ移り住んだ時からすでに存在していた。チャーリーとベルは、ベルが黒人であるために、その地を去らねばならなかった。このベルの経験は、ホームウッドの人々に語り継がれ、彼らは二人の苦い経験を十分承知しているにもかかわらず、異質な者には拒否反応を示すのである。フリーダが息子のカールに、屋外を不作法に走りまわらないようにに注意を促す時に、負の例として引き合いに出すのは、“a wild Indian”（362）である。ホームウッドのフリーダにとって、インデイアンは“wild”な異質な者である。

ホームウッドへ後の時代に移り住む黒人は、長くそこで暮す者には異質である。後に南部からやって来た黒人に対して、彼らの目は厳しい。南部からの移住者は、ホームウッドの環境を悪化させたと言うのだ。移住者の母親たちは、身なりを整えることも、子供をしつけることもできないだらしない女として、ホームウッドの人々の目に映るのである。サマンサの黒い子供たちには、ジューンバッグは他の星からやって来た者だった。

しかし、ジューンバッグと受難を共にするサマンサは、彼から生活の知恵を得るのである。“A secret to remembering what you wanted to remember and forgetting what you needed to forget”（466），即ち、ジューンバッグが、辛い生活を忘れ、自分だけの世界で生きようとしたあの知恵である。

サマンサは、ジューンバッグと黒い子供だちが、肌の色の違いを忘れ、和解する日を夢見るのだ。彼女は、ある日、黒い子供たちがジューンバッグのもとで許しを乞い、ジューンバッグも彼らを許す日が来ることを信じている。“Touble don't last always...……...Me and all my children grow wings and go swooping round the world spreading the news”[5]（468）と、未来を見つめるサマンサである。ルーシーが発見するブラザーの絵の中の人々のように、彼女にも、子供たちにも翼が生え、彼らが和解しうることを世に伝えようと言うのである。人と未来を信じるサマンサの夢は、かの有名な宗教家、Martin Luther King Jr.の “I have a dream” スピーチと重なる。

しかしながら、サマンサにもジューンバッグにも、彼らが異質であることからの解放は許されないのである。異質であることを忘れ、忘れることをサマンサに教えたジューンバッグを、“They killed Junebug because he was born with the secret and was teaching it to [Samantha]”（466）なのである。焼死したジューンバッグの死因が事故ではないことを、サマンサは確信している、“None my babies could have [Junebug] in the fire. None them could have splashed kerosene on Junebag……I know the fact”（471）。彼女は、ジューンバッグが彼女に生活の知恵、つまり、人種の拘束を忘れて生きることを教えたために葬られたと思っているのだ。ジューンバッグから忘れるという知恵を授かったサマンサも、狂気のラベルを貼られ、メイヴューという施設へ送られるのである。メイヴューに投げこまれたサマンサの部屋には、“……they locked it and threw away the key”（466）。このできごとは、人々が口当りの悪いもの、異質な者を闇に葬ってしまうことのメタファーでもある。

次の章で述べるように、ルーシーはメイヴューのサマンサを訪れるが、メイヴューはルーシーに人の判断についての疑問をもたらすのである。ルーシーは、監視人が突然彼女を捕えて、メイヴューに収容してしまうのではないかと恐れるのだ。捕えられれば、“How could [Lucy] prove she wasn't crazy ?”（473）と不安に陥るのである。サマンサも、彼女が狂気でないことを立証しえなかったのだ。

ルーシー

サマンサが収容されているメイヴューを訪れるルーシーは、玄関で靴に付いた雪を振り落すかのように、何も付いていない靴で床を力いっぱい踏みつける。彼女は、“Sam's still clinging, and Junebug and Brother and all the rest like snow on her galoshes……”（509）と思っているからである。ルーシーは苦しい過去と訣別したいと思っているのだ。ブラーザーとジューンバッグとサンマンサが回避しえなかった異質な者と黒人への差別、ルーシー自身が受けた差別、ブラザーとジューンバッグの不可解な死、サマンサの幽閉、ブラザーとサマンサの実現しなかった夢、すべてをルーシーは忘れようとするのである。しかし、メイヴューの玄関の奥にサマンサの姿を見ると、ルーシーは、サマンサも、彼女にまつわる過去も捨て去ることができなくなるのだ。それは、ホームウッドで語り継がれているオリオンとベルの精神が、ルーシーの体に浸透しているからである。そして、その精神を実証するかのようなブラザーの絵が、イコンのように、ルーシーを感動させるからである。彼女は、彼らの精神に励まされ、過去を受け入れ、その精神を実践し、未来へ語り継ぐのだ。

ルーシーがブラザーと共に孤児として育てられたテート夫妻の古い屋敷は、ルーシーには、相反する思い出の場である。母親が焼死したルーシーを、夫妻は温く迎え入れ、彼女の成長を見守った。しかし、この屋敷は、彼女には試練にたえねばならない所でもある。彼女は、この場で、人種差別による不正を見届けたのである。

ジョン・フレンチとストレーホーンの仲間であったアルバート・ウイルクスは、数年前に白人警官を撃った疑惑で追われていた。そのウイルクスがホームウッドへもどり、テート家で、白人警官に撃たれてしまう。ルーシーは、その場を目撃し、惨劇の場の後始末をしなければならなかった。その上、何よりも彼女に衝撃をもたらしたのは、白人警官の態度であった。“The white men smiling as they pulled off [Wilke's] bloody clothes”（517）であった。ルーシーは、この場面を記憶から葬

り去りたいを思うのだが、“Doot”（528）ことワイドマンに伝えるのである。

テート家はブラザーにまつわる物語の舞台でもある。ブラザーの死後、彼の部屋の整理をするルーシーだが、それは彼女にとって“hard”（517）な仕事である。この部屋はブラザー自身とジューンバッグの一生の物語を語っているからである。ところが、ルーシーが偶然見つけたけたブラザーの絵は、彼女に勇気を与えてくれるのだ。袋に入った彼の描いたすべての人々には翼があるのだ。翼のある人は、自由と天使のイメージである。ブラザーは、肌の色に拘束されることなく、すべての人が、自由に優しく語り合うことが可能な世界を夢みていたのだ。翼のある人は“could be two places at once”（519）である。自分自身の場と他者の場の両方に存在し得る、つまり、両方を理解し得るのである。

精神薄弱と多くの人に思われていたブラーザーだが、彼の思考は、肌の色から解放された次元にあった。逆境の中にあっても、人間の可能性を信じ、その信念をブラザーが表現した絵は、ルーシーへの貴重な贈物である。

メイヴューのサマンサを訪れるルーシーは、自立した精神の持ち主である。ルーシーは度々サマンサを訪れるが、彼らの関係は稀薄である。ルーシーとブラザーとカールが親しい三羽烏であり、サマンサはブラザーが愛した女性である。ただこれだけの関係でサマンサの世話を続けるルーシーは、“took that duty”（509），これを当然の義務と考えるからだ。ルーシーは、ブラーザーも子供たちも自由も奪われたサマンサのために何かすることを義務と考え、そうすることが“the right thing to do”（509）と思っているのだ。ホームウッドも時代の波に逆らうことはできない。かつては、ホームウッドの人々は、恵まれない者には手を差し延べ、老人たちを家で大切に世話をした。しかし、今では、多くの若者が一人寂しく道端で死を迎え、老人たちは施設へ送られてしまうとワイドマンも嘆く。このような時代に、血縁関係のないサマンサを訪れ、励ますルーシーをブラザーが描くとすれば、翼をつけたに違いない。

ホームウッドの精神を継承する自立した女ルーシーは、Saul Bellowが描く人物にも似ている。ベローは、アメリカ文学の主流の中で活躍するユダヤ系アメリカ人作家である。彼は、ユダヤ系の枠の中ではなく、人類という大きな枠の中で、登場人物を描いている。人としての義務を果すルーシーは、*Mr.Sammler's Planet*のDr. Grunerを連想させる。グルーナーは、ヨーロッパのキャンプに収容されているホロコーストの生還者、Sammlerを捜しだし、ニューヨークに呼び寄せ、20年以上もの間、不快な顔ひとつすることなく、サムラーの面倒をみるのである。

ベローは、死を人類共通の不可避の運命と捕らえている。だからこそ、運命を共にする他者にも手を差し延べるのであるが、グルーナーはこの運命を引き受けて生涯を全うする人である。自らの死の時を知っていたグルーナーは、看護婦にベッドごと地下室へ運ばせ静かに最後の時を待つのである。又、*The Victim*のKaplanは、“My mother sewed her own shroud”（*The Victim* 207）と、経かたびらを自ら用意していた母親について語っている。

薄暗いテート家で、過去に思いをはせながら、カールとワイドマンを待つルーシーは、“The eyes go blind sooner or later. She wants to be ready. Wants her men to be ready”（520）と思う。自らの遠からぬ老いの日の心の準備を説くルーシーである。ルーシーの言葉は、グルーナーやカプランの人生観と符号する。

暗い階段を上がり、ルーシーのもとへやってきた若いワイドマンに、彼女は、ブラザーとジューンバッグ、そしてサマンサの物語を語るのである。ブラザーの夢も、ジューンバッグのハミングに託した願いも、サマンサの夢も、彼らの生前には実現されなかったが、その精神をルーシーはしっかり受け止め、次の世代のワイドマンに伝えるのである。彼らの肉体の自由は奪われてしまったが、外的暴力は彼らの内面まで破壊しえないことを、ワイドマンも、彼の作品を彼の子供たちに捧げることによって、次世代へ伝えていくのである。

おわりに

前述のセン教授は、Dostoevskiの『罪と罰』（1866）を例に挙げ、自立した精神と人間の尊厳に触れている。『罪と罰』の主人公、ラスコーリニコフは、自分が社会的に優れた人間である、それ故、社会の役に立たない金貸しの老婆を殺害し、彼女の財産を奪っても許されると考える。サマンサの章で述べた、“sense of infallibility”によって“fallibility”を犯すのである。ソーニヤは、教育受もけていない貧しい女性だが、ラスコーリニコフに、自首をし、罪を償うように語りかける。そして、シ

ベリアで刑に服すのである。ここに、自立した精神と人間の尊厳が表現されている。セン教授は、自ら立ち上がることなくして人間の尊厳はありえないと述べている。

ワイドマンは、ヴォイス、すなわち、自立した精神が存在し続ければ、“Nothing is lost”（加藤　54）と記している。ブラザーとサマンサの人生に励まされつつ、ホームウッドで脈打つオリオンとベルの精神を継承するルーシーの一歩一歩は、小さな歩みであるかもしれないが、彼女は次世代に指針となる足跡を残していくのである。その足跡を見失わない限り、現在も未来にも、我々は人間の尊厳に至る道を歩むであろう、

> Past lives live in us, through us. Each of us harbors the spirits of the people who walked the earth before we did, and those spirits depend on us for continuing existence……（349）

と、ワイドマンが題辞で述べているように。

注

1　ワイドマンが示す家系図には、Jamilaの名前はみられないが、*Damballah*発表後に誕生したワイドマンの子供であると思われる。

2　*Sent for You Yesterday*についての言及は括弧内の数字で示す。

3　このBelleは伝説の女奴隷を示す。ホームウッドのBelleはMother Belleとする。

4　Kaddishはユダヤ教徒が死者のために唱えるアラム語の祈祷。

5　ホームウッドの一部で使われる英語を、そのまま紹介しているものであろう。

参考文献

Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Plannet*. 1970. New York: Penguin, 1971.

——. *The Victim*. 1947. Suffolk: Penguin, 1984.

Fanon, Frantz. *Black Skin White Masks*. New York: Grove Press, 1967.

『国語辞典』第5版　岩波　1994年

加藤万岳子　「ダンバラの女たち」『名古屋造形芸術大学紀要』7（2001年）51－57頁

Kertész, Imre. *Kaddish for a Child Not Born*. Trans. Christopher C. Wilson and Katharina M. Wilson. Evanston: Northwestern UP, 1992.

Kosinski, Jerzy. *The Painted Bird*. 1965. New York: Grove Press, 1995.

Mbalia, Doreatha Drummond. *John Edgar Wideman: Reclaiming of the American Personality*. Selinsgrove: Susquehanna UP, 1995.

Oxford English Dictionary. Vol.1. 2nd ed.

セン、アマーテイア　「自立した精神」『読売新聞』2002年11月27日　12版　27頁

Wideman, Edgar John. *The Homewood Trilogy: Damballah・Hiding Place・Sent for You Yesterday*. New York: Avon, 1985.

——. *The Homewood Books*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1992.